アジアの福祉に目を向けるソーシャルワーカーの育成へーアジア・サービス・ラーニングプログラム導入実証調査（スタディツアー）の実施、及びタイにおける福祉事業の実態調査

斉藤くるみ・西田昌之

１．はじめに

本研究は、サービス・ラーニングのプログラムをアジア地域のソーシャルワーク部門で実施し、国際コミュニケーション力を持つソーシャルワーカーの育成を図るとともにその効果を測るものである。本学の協定校の一つであるタマサート大学と共同して、教職員 3 名、ボランティア 1 名、学生 7 名でタイ北部を中心に 2015 年 8 月 8 日から 8 月 18 日までの 10 泊 11 日間のスタディツアーを実施し、その教育効果を評価すると共に、同地域の福祉事業の実態調査を行った。

出発前に参加学生 7 名に行ったアンケートを見てみると、参加学生 7 名中、タイへの渡航経験があるのは 2 名のみであるが、海外に強い関心を持つ学生が集まったといえる。特に海外における福祉の実地から学びに対する期待が寄せられた。また、日本においても海外（タイ）との結びつきを強く感じている学生が多く、近所のタイ料理屋や高校でタイ人同級生がいたなど、国際化する日本社会を反映する回答が寄せられた。

出発前に想定しているタイ及び東南アジアの社会状況については、「貧困」「HIV」「人身取引」「売買春」「不衛生」「低品質の福祉」などの授業において良く課題として提示される東南アジアの社会問題について回答してくれた。

しかし、海外においてソーシャルワーカーとしての活動ができると思うかという問いに対しては、1 名を除く全員が「わからない」という回答であった。「具体的な知識やイメージがない」が多くの割合を占めた。また、日本人の活動が現地の人々に対する押し付けになってしまうことを恐れる回答もあり、海外の貢献に対しては慎重な態度を取っている。研修により、学生の地域コミュニティを重視した福祉への関心度が高まり、海外での活動を身近に感じるようになる等の効果があった。

毎日、行うべきスケジュールが決定しているため、学生が体力を消耗し、ほとんどの学生が一度は体調を崩すことになった。ツアーの中でどのように休憩を組み込んでいくべきなのか、学生の自由に任せるべきか、計画に組み入れるべきかについては課題が残る。以下は報告の概要である（詳細な報告は平成 28 年度本学紀要に発表する。）

２．サービス・ラーニングとスタディツアー

サービス・ラーニングは、教室で学んだ知識と技能を用いて、自発的に国内外の実社会の諸課題を解決する社会的活動に関わることで市民としての責任や社会的役割を自覚しつ

つ、実践知の獲得することを促し、さらにその実践知を教室の中で研究教育を通して学問知として深めていく教育プログラムである 。現在多くの大学で注目しており、文部省大学教育部会においてもサービス・ラーニングの学士学生への教育的効果は大きいとしている 。一方で、すでに代表者は福祉の大学で「ことばのバリアフリーを目指して」と銘打った社会福祉に必要な高度コミュニケーション力を獲得させるプログラムを展開してきたという背景がある。

サービス・ラーニングの手法では、出発前の事前学習、現地での長期滞在の実践的活、その後の活動の評価（レフレクション）を行い、その後の学生の学習に反映させるというサイクルを持つ。しかし、本年は初年度であり、サービス・ラーニング・プログラムを完全な形で導入することはできなかった。そこでサービス・ラーニングの導入実験としてスタディツアーを実施し、海外体験の導入とその効果について調査を行うこととした。

スタディツアーは、短期の海外体験と教育を目的とする体験型のグループ旅行形態であり、現在多くの大学で導入されている。サービス・ラーニングのような事前学習、事後のリフレクションまで含めての単位認定等が行われる大規模なプログラムではなく、夏休みなどにより小規模な形で行われる。大学によっては企画・運営を学生に任せ、大学教員が承認するケースもある。スタディツアーは、サービス・ラーニング導入校において前準備として行われることが多い。

３．スタディツアー実施調査における方法論と効果測定

本スタディツアーにおいては、教員が企画運営を行い、学生からの参加者を募る形をとった。2015 年 4-7 月 国際福祉論等の授業においてに広報して、斉藤が参加者を募った。同時にチェンマイ大学日本研究センターの在籍する西田が、直接ラムパーンのタマサート大学ラムパーンキャンパスのカウンターパートであるサイフォン副センター長と現地見学・活動の受入交渉と、タマサート大学の受入準備を進めた。2015 年 7 月 斉藤と日本に帰国中の西田と一緒に出発前ミーティングを開催し、スタディツアーのオリエンテーション、事前アンケートを実施し、2015 年 8 月 8 日－18 日まで スタデイ・ツアーが実施された。

3.1 出発前の学生の意識

出発前に参加学生 7 名に行ったアンケートを見てみると、参加学生 7 名中、タイへの渡航経験があるのは 2 名のみであるが、海外に強い関心を持つ学生が集まったといえる。「元々、アジアの国々には興味があり、未だ行ったことのないタイに行き、インターネットや書物からすること以外に自分もタイの社会を体験から学びたい」など、海外における福祉の実地から学びに対する期待が寄せられた。また、日本においても海外（タイ）との

結びつきを強く感じている学生が多く、近所のタイ料理屋や高校でタイ人同級生がいたなど、国際化する日本社会を反映する回答が寄せられた。

出発前に想定しているタイ及び東南アジアの社会状況については、「貧困」「HIV」「人身取引」「売買春」「不衛生」「低品質の福祉」などの授業において良く課題として提示される東南アジアの社会問題について回答してくれた。これは大学における座学の授業で社会問題を中心に語られることが影響していると思われる。

しかし、海外においてソーシャルワーカーとしての活動ができると思うかという問いに対しては、1 名を除く全員が「わからない」という回答であった。「具体的な知識やイメージがない」が多くの割合を占めた。また、日本人の活動が現地の人々に対する押し付けになってしまうことを恐れる回答もあり、海外の貢献に対しては慎重な態度を取っている。

以上の状況から、ツアーにおける多くの学生の目的は、単に海外経験をするというものではなく、実地からの体験に期待を寄せていることがわかる。また、日本の生活で外国人と付き合うことが多くなってきているが、大学で学ぶ知識ではその国の課題を多く学ぶのみで、日常的な生活について知る事ができないという問題も浮かび上がってくる。それ故に、海外でソーシャルワーカーとして何ができるのかイメージが全くつかめないという状況になっている。

3.2　実践的まなびの設定

実際のツアーの中では、ツアーの限られた時間の中で、学習効果を高めるため以下の三点の試みを行った。

(1) 日誌（ジャーナル）：サービス・ラーニングにおいて、日誌は体験を振り返り（Reflection）と発見を学びに結び付けるために重要なツールである。本ツアーにおいては、日々の振り返りを共同で行えるように交換日記形式での日誌作成を行った（付録参照）。日誌の習慣をつける目的で本来は一人で書くものであるが、今回は複数名で記載することで他者の記述法、見方を書きながら、相互に学習する効果を狙った。

(2) 支援モデルの紹介：今回の目的の一つは、学生達に海外でソーシャルワーカーとして活動することの具体的なモデルを提示することであった。すでに述べた学生へのインタヴューにもみられる通り、海外で何ができるのかそのイメージは国内では掴むことができない。実際に現地に身を置き、福祉の活動をする人々の姿をイメージできるようにモデルを追った。

(3) 海外における自主性：自分の能力でどこまでできるのか知ってもらうために、ツアー中に安全度の高いところでは可能な限りの自由度を持たせた。ラムパーンの自由時間に自転車で回ってみたり、食事を自分たちでとってみたりなどの自由な行動の時間を設けた。

3.3 学生の意識の変化の測定

活動中、交換日誌で振り返り、さらに日本社会事業大学社会福祉学会で学生の自主企画として発表を行った。本研究を行った教員はそれらを基に海外経験の効果について検討した。

４．福祉事業の実態調査

以下ツアー中に訪れた 8 カ所の訪問地について学生の記述を基に記載する。（詳細は紀要の報告を参照されたい。）

(1)タマサート大学福祉学科：講義「タイの福祉について」

「タイの貧困層は 10.4%、一割が貧困というのは割合が高い。そのような経緯から社会福祉実践が始まったのかなあと思います。1954 年、タイで初の社会福祉学科が創立、社大は 1946 年に創立されたので、年はそれほど変わりませんが、社会福祉士が License 化してないというのが大きな違いで、タイは高齢社会ではないということも、関係してそうだと考えました。」（8 月 9 日日誌）

(2) 高齢者施設（ラムパーン県高齢者社会福祉開発センター）

「昼食を食べた後、高齢者施設を見学しました。施設は開放的で、利用者さんが運動したり、食堂、居室があり、日本の介護施設は、家のようなイメージで作られますが、ここは一つの地域のように感じました。松本さんも、おっしゃっていましたが、タイの方は、人のつながりが強いということで、日本にはない雰囲気が目新しく新鮮でした。教室の方も見せて頂きましたが、仕切りのカーテン等がないのに驚きました。国の施設に入る方は、最後のセーフティネットということで入られるので、日本の救護施設に近いのかもしれません。」（8 月 9 日日誌）

(3) 視覚障がい者施設（ラムパーン県盲学校）

「午前中は Lampang Eye Foundation へ。私立の施設で対象者は、ランパーン地域と北部の盲者。ろうと盲や精神病と盲など重複障害を持つ方もいらっしゃるそう。明日が母の日（王妃の日）ということもあり、“Khanamnom”というタイの人ならだれでも知っている母の日の歌練習を子供たちがしていた。（うるさそうに耳を塞いでいる子もいたけど…）

この施設は、教育と職業訓練の場であり、病院や失明予防運動を行うなどの役目もあった。教育はインクルーシブ教育を目指していて、この施設で器具の使い方と生活スキルを学び、卒業後、通常学校へ進学したり、施設の寮を使いながら日中は通常学校へ行き、帰寮後、生活スキルを学びながら生活する人もいるそうでした。また、タイは 15 年間の義務教育で、障害者の場合は、大学まで授業料や入学金の補助として 60000Baht 提供される。これは、勉学を大事にしていることと、障害者を全く排除しない姿勢だと思った。

他にも Community Based Rehabilitation や、助成金について教わった。段ボールの椅子作りを教えたヒロさんや、動作法を教えた日本人がいたことについては驚きでした。」（8 月 11 日日誌）

(4)障がい者作業コミュニティ：発展共同体（ニコム・パタナー）

「午後はニコム・パタナーへ。（ニコム）パタナーとは発展共同体の意味。170 名の障がい者がメンバー登録しており、毎日 9 人ほどが 8:30～12:00 に来て、生産物作りを学んでいるそう。私と斉藤先生は、ゾウのランプに惚れてしまい 300baht で購入!! まさか後で首がぽっくりとれるだなんて…、こちらでは動物・植物も沢山育てており、日本の皇太子がタイに持ってきたと言われるパッカイという魚もいました。

本日、施設見学をしていて何度か「日本の福祉は発展しているので、アドバイスをください。」と言われたが、ただの押しつけになってしまいそうで答えたくないと正直思ってしまった。斉藤先生が現代の日本では福祉で街を作ろうとしていると伝えていた通り、地域福祉が重要になってきている。タイ北部は元々ランナー国だったことや、今でもランナー語を話していて、この地域住民であるというアイデンティティを守っている様子があり、地域の人が地域住民全員を守ろうとする姿勢があった。今の日本にいて、新しい福祉技術や施設を作ることは簡単でも、地域の繋がりを作ることは難しいと感じる。海外の技術を学ぶことも大事だが、元々ある地域のつながりは、そのままあり続けて欲しいと思った。」（8 月 11 日日誌）

(5) 生涯教育施設（善行銀行・高齢者学校・大学）

「クアゴンの村議会にて。クアゴンというのは 2012 年に設立された、積極的に年を取ることを目的とする集団。設立理由は 2004 年頃から地域で高齢者の自殺が増え、そのことについて考えたこと。制服姿の日本の高齢者の動画を見て『70、80 歳になっても学生の様に学んでいきたい』と感化されたことからだという。

クアゴンでは仏教的倫理をうまく利用し、社会福祉へとつなげていったという。メインの活動は“タナカンカンディ”という善行銀行。この内容は良いことをするとポイント（カンディー）が貯まり、景品と交換できるというもの。しかし、景品がもらえるということよりも、「良いことをすると良いことが返ってくる」という簡単な押絵から伝え築き、「また良いことをしよう」というサイクルを作ることの方が活動の主目的のようだ。本当は良いことをした結果が必ずしも良いこととは限らないが、少しずつ理解してゆく、その入口との説明。

何を良いこととするのか。またその良いこととはいったいどこまでの人に当てはまるのか…など曖昧な部分はあるが、この地域の信仰を理解しないことには判断は難しそうだと感じた。しかし、この活動で大切なことは、地域で自らが役立つことを形にして表現することから喜びが得られ、生きる活力になることなのであろう。なにものを信じるにせよ、

年をかさねて生き生きと前向きに暮らせることほど素晴らしいことはないと思う。

また、タナカンカンディ以外のプロジェクトで高齢者学校事業があり、このプロジェクトの目的は生活の質の向上させることだそうだ。目標は次の①~③の 3 段階あり、それぞれ 1 年を通して学んでゆく。お寺にて毎週木曜日。

①本質を知る…知識向上の基礎教育。仏教、公衆衛生、社会学、文化、地元の伝統（音楽等）、語学、IT、etc…

②実行する

③伝える

高齢者学校の先生になるのに資格はない。各々が得意な分野を教えているそう。例えば校長先生は以前高齢者福祉の専門家だった。2012 年から 3 年間やってみて、家に帰らず施設に残りたがる高齢者ばかりだった為、“大学”というものを作ったという。今後高齢者学校の卒業生はどうするのかは未定。

高齢者とは人生の先輩であり敬うべき存在だと私は思う。歳を取りできることは少なくなっても、彼らが培ってきた貴重な経験を新しい世代へ伝える場を作ることは本当に大切だ。重ねて、そういった場があることで子供たちとの交流が増えるのも良いことだと思う。健康寿命が延びると良い。」（8 月 12 日日誌）

「高齢者学校に着いて、みんなで体操して、朝から元気だなあと思いながらやって、途中面白くてホテルに帰るまで楽しみました。一年生から 5 年生ぐらいまでのクラスを見学しました。1 年生では社会学をやっていて、聞いていてもとても難しい内容をやっててびっくりしました。2 年生では、IT 関係の勉強をしていて、勉強して孫、子どもたちに伝えていくことが大切であるとも聞いた。また仏教の授業もあった。そこでは火、風、水、土の四つから肉体ができていることの説明をしていた。その 4 つの調和を保つことが必要なのだと言っていた。」（8 月 13 日日誌）

(6) 山岳少数民族対策（ミラー財団）

「会議室（?）に戻ったらちょうど説明が始まった。スタッフの方々のご挨拶の後に始まった。スタッフの一人が日本人だった！やっぱり日本人に会えると嬉しい！

少数民族の教育をしたりすることを通して生活の向上を目指している団体だった。山岳の少数民族は、経済的な貧困、人身売買、麻薬の乱用、文化・伝統の侵食、無国籍、初等教育不足、差別や偏見など多くの問題にさらされている（引用:ミラー財団ホームページ）。ミラー財団を謝意書に立ち上げたのが大学生だと聞いてすごいおどろいたし、刺激を受けた。たくさん活動している財団を立ち上げるまで色々と大変だったんだろうと思うけど、大学生でもできることを学んだ。」（8 月 14 日日誌）

(7) 孤児・HIV 感染者福祉施設（バーンロムサイ）

「ban rom sai では代表で創立者の名取さんが説明してくれた。

チェンマイを選んだ理由が、元々遊びに来ていただけということ、そして友人の意志につれられて AIDS 患者を初めて見て、その光景に驚き、活動を始め、なんだかんだ流れで ban rom sai の代表にまでなってしまうという行動力にはとても驚いた。

最も印象に残ったことは、地域の人から差別をなくすための方法で、図書館を建てたり、サッカーチームを通じてコミュニケーションを図るなど、地域に応じた方法があることを学んだ。

そして、隣接する“hoshihana village”へ。映画で見たそのまんまでプールも結構深め（?）でとても綺麗だった。いつかプライベートで泊まってみたいです。ここのお土産屋さんでは、ban rom sai の人が作った工芸品を販売している。昨日のミラー財団のものと比べると、１コ１コの作りがとても丁寧で明るく、日本に持ち帰っても自然に使いやすいものばかりで、デザインが日本人の指示である意味がよくわかりました（価格設定も日本人観光客向けかな？）

また、ここには日本人のボランティアスタッフも多く、日本語が通じたり、清掃が行き届いていたり、プールサイドには 24 時間利用できるセルフのカウンターサービスがあるなど、日本人好みの要素が沢山で日本人をターゲットに絞った上手な運営をしているなと感じた。」（8 月 15 日日誌）

(8) 聴覚障害者施設　（タイ北部ろう協会）

「チェンマイろう者協会では、タイのろう教育などの現状について学ぶことができた。…途中でタイ語手話⇒タイ語⇒日本語の二重の通訳でなかなか話が進まない時もあって、今更だけどタイ語がわかったらどんなに良いことか…。

時間差で通訳したり、二重で通訳したりすると元の人が伝えたいことがどのくらい伝わるのだろうとか、ボーっと考えてました。

話した時の表情がわからなくなるから、感情があまり伝わってこないのかなぁて思った。」（8 月 15 日日誌）

(9) 元ハンセン病施設（病院・コロニー）（マッキーン・リハビリテーション・センター）

「まず向かった先は、McKean Rehabilitation Center。ハンセン病の Museum にて。Smith さん（女性）よりお話をして頂きました。タイのおけるハンセン病の歴史、McKean Leprosy Center の歴史などなど。

タイでは、ハンセン病患者は差別を受け、村から追い出されて都会の橋の下に暮らし、夜の間にマーケットに行き、残った食材を拾って暮らしていたそうだ。この Leprosy Center を創設した McKean 先生（医師）は、チェンマイのクリニックで当時働いていた。この様なハンセン病患者の境遇を知り、どうにかできないかと考えた。もともと王室の土地であった場所を王妃に頼んで、もらい、そこを使ってハンセン病患者の村を作った。家を建てて、仕事をつくり、ハンセン病患者たちにここで暮らすように勧めた。ここの村に住む住

民は、紡績や布を織る仕事などをしていた。（中略）第二次世界大戦中、ハンセン病の治療薬が開発された。当時、投薬法で課題があったが、それも解決され、ハンセン病の治療、回復が可能となった。

タイでは、日本のような強い隔離政策はなかったが、スティグマや差別はあったとのことであった。

McKean では、患者が元のコミュニティに戻れるようにするため、職業訓練を行っている。患者を元のコミュニティに戻そうと、家庭に連絡した時、「貧しくて受け入れる事ができません」と断られることがある。そのような場合、患者本人が仕事をする事ができ、家庭の収入に貢献することができたら、それが実現する。また、本人にとっても、家庭の収入に貢献しているということが、自信につながる。McKean では、患者をひとつところに閉じ込めるのではなく、他の人たちと関係性を持てるようにする支援、本人の自立をさせる支援をしてきたのである。」（8 月 16 日日誌）

５．考察

学生の変化として目立ったことは、地域コミュニティを重視した福祉への関心の喚起ができたこと、そして海外での活動を身近にする効果があったと考えられる。

プログラム設定上の課題として残ったのは以下のような課題である。第一に事前事後の準備の拡充が必要である。事前準備として、サービス・ラーニングプログラムにおいては、サービスラーニングの意味、奉仕・ボランティアの経緯と研究、語学、調査法、協力先の団体や社会の研究を行うが、本事業においてはそれだけの余裕を取ることはできなかった。事前のオリエンテーションを一度行っただけでの出発となった。